

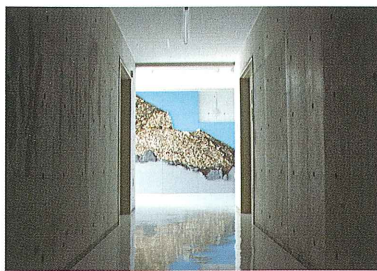
## 噴火湾北岸 縄文エコミュージアムへの小道

北海道大学大学院文学研究科教授 小杉 康



### ■コア・ミュージアム開設

「噴火湾北岸縄文エコミュージアム」(略称JEM)、皆さんご存知でしょうか。そのガイダンス施設兼ミニミニ展示室(「コア・ミュージアム」といいます)を2009年2月2日にオープンいたしました。噴火湾文化研究所の1階を奥へ奥へ進むと、暗いトンネルのような長い廊下の向こうに白い貝層が見えてきます。そこを50歩で歩み進んで暗がりをぬけると、ぱっと陽光が降り注ぐホールに出ます。そこがJEMのコア・ミュージアムです。



### ■噴火湾北岸縄文エコミュージアム

エコミュージアムとは何か。少し堅苦しく定義すると、特定の地域内(テリトリー)に散在する自然(天然記念物)・遺跡・建造物・民俗行事などを、サテライトと呼ばれる「自然遺産」・「歴史遺産」・「産業遺産」・「民俗遺産」として認識・研究・整備・保護して、その地域の自然環境・歴史・生活文化を学習・理解し、地域生活・地域文化を活性化し、よりよい状態で次世代に引き継ぐことを目的とする活動とその対象と組織体の総体、といったところです。この場合、テリトリーとは「噴火湾北岸」となりますが、今のところ伊達市域から豊浦町域までを具体的な視野に入れていきます。サテライトはまだ2箇所だけです。伊達市の有珠6遺跡と豊浦町の小幌洞窟遺跡です。看板に「縄文」と掲げてありますが、キャッチフレーズのようなものです。必ずしも縄文の遺跡に限るものではなく、人類遺跡全般を念頭においた、やや考古学に特化したくらいの意味にとってください。

### ■エコミュージアムへの小道

さて、サテライトはコア・ミュージアムとよばれる本部事務局がおかれる施設を中継地点として情報的にネットワークされ、「来場者」(参加者・住民)はディスカバリー・トレイル(「発見の小道」・探索路)とアクセス道路を通して各サテライトを訪問・観察・学習します、と定義が続きます。これがエコミュージアムの完成されたイメージですが、実際には完成形はありません。

主催者と来場者が持続的にかかわり続けることによって維持される活動がその本体だからです。サテライトが2つの我がエコミュージアムは、まだ産声を上げたばかりですが、それでもここに至るまでの道のりは、そう短かったわけではありません。多くの方々からの支援を受けながら、なんとか形が見えてきたところです。その道筋をかいつまんでご紹介します。

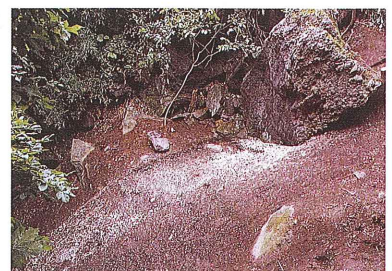
### ■実習地探し

私が北大に赴任して、はや干支が一巡しました。話はそこまでさかのぼります。赴任当時、北大文学部には考古学実習、すなわち発掘調査の授業がありませんでした。かつては盛んに行われていたようですが、ここ何年もの間、行われていませんでした。考古学専攻で発掘実習が無いということは、インターンに出たことのない医学生を育てるようなものです。さっそく考古学実習のカリキュラムを復活し、実習地探しを始めました。東北の岩手県や道東の斜里、積丹半島、噴火湾沿岸など、いくつかの候補地が挙がりました。

### ■「貝塚のある岩陰遺跡」

そんなさなか、大島直行所長(当時文化課長)から「縄文海進」の問題に迫れる「貝塚のある岩陰遺跡」がある、といった面白い遺跡のお話を聞くことができました。有珠6遺跡です。縄文海進とは、地球上の気温が上昇して氷河期が終わりますが、それによって引き起こされた海面上昇のこと(氷河性海面変動といいます)で、今から約7~6000年前頃にピークに達しました。

伊達市域は北海道でも有数の貝塚遺跡が多くあるところ、いわば「貝塚地帯」です。岩陰遺跡はそれほど多くありませんが、珍しい存在でもありません。しかし、「貝塚のある岩陰遺跡」となると話は別です。がぜん興味がわきました。背後に有珠山を控え、前面に噴火湾を望む景勝の地にある有珠6遺跡で実習調査が実現できたなら、どんなに素晴らしいことか。地権者の渡辺喜之助さんをはじめ、地元の皆さんや伊達市教育委員会の方々にこんな願いを聞き入れていただき、2000年8月からの発掘調査が予定されました。





## ■有珠6遺跡

有珠6遺跡の名はそれまで考古学界ではあまり知られていませんでしたが、地質学の方面では重要な研究成果がありました。有珠善光寺の周辺は、「流山」という小さな丘が点在する特徴的な地形をしています。それは有珠山の山体が崩壊して生じた「善光寺泥流」によって作りだされたものですが、その発生時期すなわち有珠山噴火の時期がいつなのか。有珠6遺跡はそんな流れ山の中腹斜面に立地しています。時期は縄文前期。つまりその頃にはすでに有珠山の山体崩壊が発生していたことになります。その研究が行われた当時、縄文前期の年代観は約6000年前と考えられていました。このような検討を重ねた結果、有珠山の山体崩壊の年代として「9000年前以降、6000年以前」という値が得られていました。

## ■2000年の噴火

いよいよ発掘調査を間近に控えた2000年3月末、なんと22年ぶりになる有珠山の噴火です。8月の調査の実施が危ぶまれるなか、こんな時だからこそ大学は弱腰にならずにしっかりと地域研究をしてほしい、といった教育長や大島所長からの励ましを受けて、それから2005年まで、6年間にわたる有珠6遺跡での発掘調査が始まりました。以上のような経緯を受けて、調査課題を「噴火湾岸域における後氷期の自然環境の変動と人類適応」としました。このタイトルで、2001年度からは文部科学省の科学研究費補助金を受けることもできました。

## ■調査の成果

6年間の調査内容の詳細はここではふれませんが、多くの成果が得られました。本文の冒頭で紹介したコア・ミュージアムに展示してある貝層の剥離標本は、貝層としては道内最古（縄文早期の約8000年前）のものです。貝層直下の流山の土中から採取した炭の薄片を理化学的な方法で年代測定すると、12000年前に達する値が出ました。この結果だけでは前述の有珠山の山体崩壊の年代を10000年前以前の氷河期へとさかのぼらせるわけにはいきませんが、従来の年代観は大幅に見直されなければならなくなりました。

## ■岩峰にて

毎年8月に行った2週間の調査は遺跡の下草刈から始まります。6年も草刈りを続けると、最初はまったく見通しが利かなかったブッシュもすっかりと刈り払われ、遺跡の背後には大きな岩塊が現れてきました。調査の最終年、私は涼やかな風を受けながらその岩塊の頂上に腰をおろして、互いに連携をとりながらも自主的に活



動している考古学専攻生たちのたくましくなった姿を眺めていました。当初は、「自然環境の変動と人類適応」といった学術的課題を前面に押し出した調査計画を立てるばかりで、先に述べたようなエコミュージアムの「エ」の字も念頭にありませんでした。ここに至って、次の実習地を探しながらも、この有珠6遺跡の成果を地元の皆さんに広く知っていただきたいという思いとともに、1万年に近い年月の風雪を刻んだ岩肌を露にした遺跡の新たな景観を見晴らしのよい状態のままに保ちたいといった欲も湧いてきました。

## ■エコミュージアムの発想

この3つの思いは決して別々の方向を向いたものではなく、地域で研究を進めるためには当然到達しなければならない段階だと、遅ればせながら私もこの6年間の調査を通して考えるようになりました。そのための調査研究費用を獲得するために、文科省科研費の新たなテーマとして練り上げたのが「噴火湾北岸縄文エコミュージアム構想とサテライト形成」です。もちろん有珠6遺跡が第1のサテライトです。サテライトの学術的な内容を充実させるために、有珠6遺跡の周辺の自然史的な調査を継続することにしました。噴火湾文化研究所内の一角をお借りしたコア・ミュージアムの開設もここに実現しました。

## ■小幌洞窟遺跡

また、新たなサテライトの選定・形成も必要です。考古学実習も兼ねられる実施条件はなかなかハードルが高いものです。そんな中で豊浦町の皆さんの絶大なるご支援の下、小幌洞窟遺跡（礼文華小幌海岸）をその候補地とし、調査を開始することができました。2006年から始めて、今年度で5年目、科研費はすでに期限切れですが、調査は継続しています。

## ■未来へつなぐ

そうは言っても大学の一研究室が行うことです。予算的にも限られていますし、距離的にも離れているために、常時細やかな目配せもままなりません。遺跡は目を離すと、自然に風化劣化してゆきます。盗掘も受けず、ゴミが捨てられるかもしれません。しかし適切・適度に手をかけることによって、遺跡は文化資源へと持続的に成長してゆきます。これまで大学研究室が中心となってサテライトの整備を行ってきましたが、今後は熱意のある地元の方々と共に、さらに地元の方々が中心となって、次なる新たなサテライトの形成やエコミュージアム全般の運営に取り組んでいただけたらと願っております。遺跡を文化資源として育てるためには、常時見守り続けるあたたかい眼差しが必要です。道は通る人が無くなると消えてしまいます。ここまでたどり着いたこの小道を、さらに先にまでつなげるために、多くの皆さんの参加をお待ちしています。